

「第1回中国・四国ブロック クラブ育成推進協議会」開催報告

日時;平成17年9月17日(土)13:00~17:00

会場;オリントホテル高知

去る2005年9月17日に、高知県のオリントホテル高知で、第1回の中国・四国ブロッククラブ育成推進協議会が開催された。中四国地区全体で78の指定クラブが総合型クラブの創設に向け、現在、活動を行っているが、その内の22クラブとその育成を支援する9県全てのクラブ育成アドバイザー、そして日本体育協会クラブ育成課員と地方企画班員が今回の協議会に参加した。

この協議会の目的は、「情報の共有化」と「ネットワークの強化」である。つまり、この協議会を終えるときには、参加した指定クラブのメンバーが悩みを打ち明けたり、知恵を出し合ったりしながら、クラブ育成に関するヒントや情報ネットワークだけでなく、スポーツやクラブ育成に対する夢と希望と勇気を得てほしいという願いがこの協議会に込められている。以下では、会議の様子について振り返る。



1. プログラムの概要

協議会の最初のプログラムとして、パネルディスカッションが行われた。テーマは、「いきいきとしたクラブづくりの進め方:クラブ創設とクラブ設立後の組織運営を考える」というもので、コーディネーターには、地方企画班員で広島市立大学の曾根氏、パネラーには中央企画班員で愛知県広域スポーツセンターの榊原氏と、自らクラブマネジャーとしてクラブ創設に携わりながら、高知県のクラブ育成アドバイザーを務める小松氏が登壇し、曾根氏のテンポと歯切れのよい舵取りによって、パネルディスカッションは、この後のグループワークをすすめるための指針的な意味合いを果たした。

その中で榊原氏は、「市町村の行政機関、中でも教育委員会と学校をどの様にその気にさせ、クラブづくりとリンクさせるか」という提案をした。つまり、教育委員会を中心とした行政機関は、スポーツを振興するという行政課題を持っているため、この行政課題を達成することと、クラブを育成するということをいかに関係づけるかが、行政の支援を受けることができるかどうかの鍵を握るということである。既存団体が既得権のように握っている学校施設も行政とパートナーを組むことができれば、施設の利用者調整会議において、総合型クラブの利用枠の優先順位を高くさせることも可能になると述べた。また受益者負担がなかなか浸透しない中で、クラブ運営に費やす会費と、自ら参加するスポーツ種目の活動にかかる参加費とを区別し、それらの性質や考え方を変えていくべきだと主張した。

小松氏は、指定クラブとして現在、クラブの創設にかかわる経験を活かし、指定クラブが手を焼いているといわれている事務処理に関して、高知県内の状況を事例に上げ、県内指定クラブの連携を強化し、継続クラブが新規クラブに手ほどきをしながら、事務処理だけに留まらず、クラブ育成のアイデアや情報交換を行うべきだと述べた。またクラブづくりには夢が必要で、クラブのシンボルとなるものをつくり、その賛同を得るために、まさしく選挙活動を手本とし、地域の人達と握手を交わしながら、クラブ育成の必要性を訴えかけるようなPR活動をすべきだと主張した。

その後のグループワークでは、あらかじめ、都市規模・設立母体・クラブの特徴が類似する3～4クラブずつのグループに分け、経営資源(人材、活動場所、資金、運営ノウハウ)、組織間連携、理想のクラブ像とスポーツや地域に対する夢という3つの視点からクラブ創設にかかわるディスカッションを行い、グループ内の情報の共有化が図られた。1 グループのクラブ数を少なく抑えたのは、できる限り参加者が口を開く機会を多くつくるということで、休憩時間もはさまず、各グループでは、ひとりでも多くの人々をクラブに巻き込む方策や、既存団体との連携や距離の置き方、また財源確保のアイデアなどについて熱心に討議がすすめられた。

全体会は、各グループで討議されたことが総花的に発表されたので、少々物足りなさを感じたが、参加クラブがバラエティに富んだクラブの情報を聞き、考えても見なかったようなアイデアやクラブ育成の魅力について多少なりとも感じ取ってくれたのではないかと思う。



全体会の締めくくり、コーディネーターの曾根氏がヤン・カールソンの「真実の瞬間」に記される花崗岩の石材を切り出している二人の石工の話を用いた。それは、自分の仕事について、ある石工が不機嫌な表情で忌々しい石を切っているのだという目の前のことを話したのに対し、もうひとりの石工が大聖堂を建てる仕事をしているのだと完成した後の全容を思い描き、その建設工事の一翼を担っているという誇りを持つ石工の方がはるかに生産的で、仕事の満足度が高いというものである。つまり、総合型クラブの育成も目の前の煩雑な事柄にうんざりするのではなく、より豊かなスポーツライフを自ら歩むとともに、将来の子どもたちにも素晴らしいスポーツ環境を築くための一翼を担っているのだという意識を持ってほしいという含蓄のある締めくくりの言葉であった。

2 . 会議を終えて...

この会を開催するにあたり、地方企画班で話し合ったことは、「複雑化するクラブづくり」に歯止めをかけたいということであった。スポーツ振興基本計画に総合型クラブの育成が位置づけられ、2010年までに各自治体で少なくとも1つ以上のクラブを育成することが気運を盛り上げるどころか、足かせのようになり、いくつかの地域では、クラブの設立そのものが目的化し、豊かなスポーツライフの創造という本来の目的が置き去りにされている。またクラブ設立の理由として、医療費の削減やコミュニティの形成が強調され、いわばクラブづくりによる副産物が一義的にさえ捉えられている。

そもそも人々はなぜスポーツをするのか？理由は簡単である。面白いし、楽しいからに他ならない。クラブづくりとは、そんなに苦しく、楽しくないことなのか？確かにクラブを育成するにあたって、それにかかわるスタッフの苦労は人並みではないのかもしれない。ただ、楽しくないことは続かないし、そう考えれば、楽しくなければ、クラブづくりどころではないことだろう。スポーツと同様、「楽しさ」を原点とするクラブづくりが地域で進むこと、それが地方企画班員の切なる想いである。

(報告;長積 仁 中国・四国ブロック 地方企画班長)